



パンダのジュー

中田しん

大都会の喧騒は出来の悪いオーケストラのようで、行きかう人々は皆忙しそうな顔をして大急ぎで足を運んでいる。ビジネスマン。飛び交うMONEY。着飾った華やかな女たち。

しかし大都会にはそういった表の顔があれば裏の顔もあるのだ。表の顔の住人たちの足元、下水溝のフタは裏の世界への入り口。

地上から流れていく下水は地中深くなるほど次第に集まって地下水脈のような大きな流れになってゆく。ドブのような下水は猛烈な臭気を放つ。大昔に造られた下水道の壁と床は何十年ものあらゆる汚れが浸み込んだ崩れかかったレンガで出来ている。迷路のような下水道の中には裏の世界の住人、魑魅魍魎が棲んでいるのだ。

まるで洞窟のような、魔窟と言っても差支えないような、下水道局の作業員も足を運ばない最下層。その薄汚れた通路の床に、見事な霜降り的高级ステーキ肉が落ちていた。なぜそんな場違いなモノがこんなところに？そんなことはこの際大した問題ではない。

壁の隙間の闇に光る小さな目。あたりをうかがいながらそーっと出てきたのは汚れたドブネズミだ。ドブネズミが高級ステーキ肉に寄りつき、その口をつけようとした瞬間、威嚇の鳴き声が響いた。小心者のドブネズミはあわてて壁の隙間に退散していった。

現れたのは野良猫。舌舐めずりしてあたりを見回し、今まで食べたことも無いような御馳走にありつけると高級ステーキ肉に喰らいつこうとする野良猫だったが、そうは問屋が卸さない。

野良猫の背後から凄みのきいた唸り声が響く。猫が振り向くと、闇の中から薄汚れた狼が現れた。「その獲物はお前にはふさわしくない。」そんな唸り声の前に、渋々退散する猫だった。

勝ち誇ったような表情で肉の前まできた狼は、にやりと笑いながら高級ステーキ肉に齧りつこうとするが、その狼の背中に迫ってきた丸い影。無言の威嚇に怯え、凍りつく狼。狼が恐る恐る振り返るとそこには。

逆光にそびえる巨大なパンダが冷徹に狼を見降ろしていた。食物連鎖の頂点の存在の登場に、狼といえどすごとと退散するしかない。まさに弱肉強食。

巨大なパンダ。その名はジョー。

田舎の夜というのはまっ暗いものである。街の明かりも電灯もない田舎道を、人間の母親が人間の幼い男の子をおぶって小走りに駆けて来る。草履が砂をかむ。

激しい息遣い。それは母親のものか子供のものか。

「お、お母さん…はあはあ、く、苦しい…。」

「坊や、頑張って。もう少しの辛抱よ。もう少しで先生に診てもらえるからね。」

母親も必死である。

やがて行く手におぼろげな明かりが見えてくる。それこそは田舎の診療所の玄関。

なんとか辿りつくとも母親はドアを力いっぱいがんがん叩いた。

「すみません！急患です！先生！先生ー！お願いします！」

必死の形相でドアを叩き続ける母親。その背中で男の子がぐったりしている。すでに言葉を発する元気も無いようだった。

ところは変わってここは大都会。街路はクルマの大渋滞、クラクションが鳴り響く。

立ち並ぶ摩天楼。まるで森のようなビルの群れ。

そのビルの群れに埋もれるように赤い十字のマークの建物、総合病院がある。

大きな外来受付に並ぶ患者たち。病室で寝ている入院患者たち。

Drの札がかかったドア。電話で話す声が聞こえてくる。

白衣を着た中堅の医師（人間）がオフィスで電話をしている。相手は田舎の診療所の医師だ。二人は同期の医学部卒で、何でも腹を割って話し合える友情が電話線のように二人を結んでいる。

しかし今話し合われているのは切羽詰まった患者の容体についてだった。

『クランケは今は安静にしているがいつ発作が起きても不思議じゃない危険な状態だ。』

田舎の医師は患者が心底まずい状態であることを証明するように必死の声だ。

「何とかこっちに移送できないか？こっちなら設備も整っているんだが。」

都会の医師もまた必死だ。彼らには病人を救う力もあればそれに伴う義務も苦痛もある。

『無理だ。なんたってこちらは田舎だ。都会まで行けるまともな道路も無いじゃないか。しかもこちらには車も無い。』

沈黙。どうしたものかと都会の医師は空いた手で頭を抱えた。

「困ったな。」

絞り出したような声が困惑を現していた。

『何とか特効薬をこっちに送ってもらえんか？』

特効薬はあるのだ。しかしそれは都会の総合病院にしか無い。

「そっちの村に行くには砂漠を通らなきゃならん。盗賊も出る。そんな中、特効薬を運ぶ奴がいるかどうか」

絶望か？都会の医師はこうべを垂れた。なんとかできないものか。

「私に、一人だけアテがあるわ。」

いつの間にか部屋にいた女の艶っぽい声が都会の医師の耳を捉えた。

医師があらためて目を開け、顔を上げると、真っ赤なドレスを身にまとった謎の美女が妖艶な微笑みを浮かべていた。

都会の地下洞窟。むしろ魔窟。薄汚れた魔王のようなパンダが足を投げ出し壁にもたれて寝ている。いや、目をつぶって瞑想していると言ってもいい。何を考えているのか。さっき喰ったステーキ肉のことか？パンダが肉なんか食べるのか？この際そんなことはどうでもいいのだ。パンダにも休息は必要だ。

そんな地獄のような汚物にまみれた魔窟に、カツコツと近づいてくるハイヒールの音。全く場違いな赤いドレス。女の影。

化粧の匂いと濃厚なフェロモンをふりまきながら赤いドレスの美人がパンダの前で止まる。怪訝そうに目を開けるパンダ。その相手に一瞬驚くがすぐにたしなめるような表情に変わる。

「ここはお前みたいな表の世界に生きる人間の来るところじゃねえ。さっさと帰りな。」

言いつつまた目をつぶり、居眠りを決め込もうとしたパンダ

「あなたにお願いがあるの。ある人が田舎村の診療所で大病で苦しんでいるの。そこへ都会の病院から特効薬を運んでほしい。途中砂漠もあるし盗賊も出る。」

その声も艶っぽく、その懇願に普通の人間の男ならくらくらっと二つ返事でOKしてしまいそうな声にもパンダはクールだ。

「俺は人助けはしない主義だ。」

そんなこと言わないで。言外に潤んだ美女の目が訴える。

「患者の命にかかわることなの。これはあなたにしかできないことなのよ。」

ふん、とひとつ鼻を鳴らし、やや顔を斜めに構えたパンダは、しつこい女だ、と言わんばかりだ。

「目障りだ帰ってくれ。」

腕組みをした美女が腕を解いて、ハンドバッグの中から何かを取り出した。

「これが患者の写真よ。次に発作が起きれば命は無いわ。」

そう言いながら美女はパンダに写真を押しつけた。思わず美女の白魚のような手をはらいのけようとしたパンダ。

「何だそんな面倒なことは俺は…」

その瞬間、パンダは見てしまった。写真はまだあどけない人間の幼い男の子の笑顔のアップだった。年の頃5歳、といったところだろうか。パンダの目が大きく見開かれる。

これは…

瞬間、パンダの脳裏に子供達の歓声が聞こえてくる。ガラスの向こうに鈴なりになっている子供達。1人残らず笑顔ではちきれそうだ。その目はみんな生き生きと輝いている。

「わーっ、しろくろだー！」

「かわいー！」

「うごいたー！うごいたよ！」

「あっ！こっち見た！」

「えさたべてるー！」

夢中で手を振る子供達。皆パンダの一挙手一投足に注目し、歓声をあげる。

その交感も束の間の夢か幻か。一瞬の幻想のあと、パンダの意識は汚物にまみれた地下下水道の現実に戻る。

思わず握りしめた写真にパンダの涙の粒が落ちる。一粒、二粒。

パンダは子供が大好きなのだ。流れる涙もそのままに思わず立ち上がり、拳を握りしめたパンダが言い放った。

「…俺がやるぜ。」

美女の艶やかな唇の端がわずかに上がった。

乾ききった地表。どこまでも続く砂と岩の地平線。砂漠の向こう、荒涼たる岩山の下にオアシスがあった。空は碧く、その濃い色はそのまま宇宙に続いているかのようだ。なぜこんなところに人が住むのか。そんなことは問題ではない。そこには確かに村があって人が住んでいるのだ。平屋の簡素な家が数十軒、オアシスの池のほとりにへばりつくように建っている。その村の貧相な目抜き通りに小さな小さな診療所がある。

設備も旧式化した田舎の診療所の診察室。診療所に1人しかいない医師（人間）が患者の母親に話をしている。診察室は医師の小さな机にレントゲン写真が数枚かかっている。二人は向かい合って座っている。医師はレントゲン写真をちら、と見てから患者の母親に向き直り、おもむろに喋りだした。

「現状は症状にあわせて対症療法的にお薬を調合しています。つまり本格的な治療は現状ではこの診療所ではできません。しかも病状は非常に良くない。このままでは完治は期待できません。」

母親は沈痛な表情だ。しかしそれは突きつけられた事実であり、いたしかたない。

「存じております。」

納得できるはずもなく、しかし気丈にも母親は頷いてみせた。

医師は心、と息を吐き、一瞬笑顔を作った。

「しかし奥さん、実は都会の大病院から根本的な治療ができる特効薬が届く手はずがようやくついたのですが…。」

なんということか、これぞ一筋の光明。とたんに母親の表情が明るくなった。

「ええっ！本当ですか！これで坊やが助かります。なんてありがたい…。」

母親は両手を胸の前で組み、ありがたい、ありがたいと繰り返した。

一方の医師は一瞬の笑顔を引き締めた。先ほどの言葉に含みを持たせたのは、希望が叶えられない可能性を考えてのことだ。

「しかし安心はしないでください。途中にはまともな道路も無いところもあります。」

母親の顔を正面から見据えて、医師は現実を口にした。

母親は戸惑ったように「そ、それでは…。」と返す。それでは、その結果、どうなるのか。やはり最悪の事態というものを考えねばならないのか。

「ええ…。治安の悪いエリアもあります。特効薬がここに届かない可能性も考えた方がいいでしょう。次の発作がヤマになると、覚悟しておいてください。」

医師というのは非情な職業だ。全ての患者を救えるとは限らない。そんな現実の前であがいてあがいて、それでも救えなかった命を悔いることもある。それが幼い子供であれば襲ってくる無力さは半端ない。思わず項垂れた医師を見て、母親は一条の光明が薄れてゆくを感じていた。

「そ、そんな…。」

診察室は沈痛な雰囲気にも包まれた。

朽ちたレンガに覆われた酷い悪臭の薄暗い地下通路を肩をいからせパンダのジョーが行く。汚いレンガの床を踏みしめる一步一步が地響きを呼ぶ。虫が逃げる。ネズミが逃げる。猫が狼が怯える。そんな魑魅魍魎どもをじろ、と睨み威嚇しつつパンダが往く。やがて壁についた錆びた梯子が見えてくる。

パンダは梯子を一段一段確かめるように登る。それは闇の世界から光の世界に転移するための儀式であるかのようにだった。

大通りの歩道のマンホールのフタをがらんと開き、地上に出てくるパンダ。眩しさに目を細めたパンダは周りを見回す。周囲にいたビジネスマンやOLたちが何事かと振り向くが、そこにいたのはパンダである。パンダが、地下から出てきた?! そんなバカな。

パンダは一つ深呼吸をして、光の世界の空気を吸い込んだ。

「地上の空気はうまいぜ。」にやり、と笑ったパンダが眼光鋭く辺りの人間を睨みつける。

「見せもんじゃねえ。」ドスの聞いた低い声。周囲に集まりつつある野次馬どもを威嚇する。

人間たちはパンダの意外な表情に恐れをなした。このパンダ、怖い。人間たちが何事も無かったかのように散る。パンダはどっこいしょと声を出しながら腰を地上に上げた。

ブティックや露店のあるお洒落な大通り。地下のものとは比べ物にならない綺麗なレンガ敷きの歩行者天国をパンダが往く。

人々が奇異の目で見ると見る。オープンカフェでお茶を飲んでいたお洒落なギャルたちがパンダの存在に気付いて立ち上がる。それぞれ色とりどりの華やかな服をひらひらと揺らしながらハイヒールを響かせパンダに駆け寄る。

「きゃーパンダよ、パンダちゃんよ！」

「かーわいいー！」

パンダを取り囲んだギャルたちはパンダの頭をなでる。

「きゃーもふもふよー！」

数秒黙って呆れた顔でされるがままにしていたパンダの表情が、みるみる鋭くなってゆく。そして眼光鋭い目でギャル達を睨みつけた。空気の読めないギャルたちがパンダをべたべた触り、その感触を楽しむ。

「邪魔だ。どけ。」パンダがたまらず発した棘のある一言にギャルたちの手が止まる。

ギャルたち、顔がひきつり、ささーっと退いてパンダに道を開ける。モーゼよろしく左右に割れ道を作ったギャルたちの驚愕の視線を浴びながら、パンダは再び歩みを進めた。

都会の病院の診察室には、何というか、不思議な空間が現出していた。都会の医師がデスクの椅子に真剣な顔で座っている。患者用の椅子にパンダが真面目な顔で座って向き合っている。傍らに真っ赤なドレスの謎の美女もいる。それはその組み合わせが非情にシュールな、というか、まるでパンダが診察を受けているかのような、美女がパンダの保護者であるかのような、まあそう

いう情景である。

黙って見つめあっている医師とパンダ。しかし実際のところ、医師は何と言っていいのかわからなかったのだ。医師はややうつむいて右手の指を眉間にあて、それからパンダの傍らに立つ美女に視線を送った、曰く、何とか言ってくれ。美女は、男ってしょうがないわね、と言いたげな表情を一瞬見せたが、ほほ笑んで、こう言った。

「彼がパンダのジョーよ。」

それはパンダはパンダだから見れば分かる。このパンダの名前がジョーなのだろう。パンダの目がぎろ、と光った。こいつは本気だ。本気の男の目だ。医師はパンダの目をまじまじと見つめ、そう思った。一方美女を見るとゆったりとほほ笑んでいる。

医師はようやく声を出した。

「き、きみが特効薬を田舎の診療所まで持っていってくれるのか？」

パンダは黙って頷いた。男は黙って何とやら。いいだろう。医師は腹をくくった気になって、パンダに諭すように言った。

「これには子供の命がかかっている。君を男と見込んだ。くれぐれもたのむ。」

医師もパンダも真剣そのもの。パンダは右の拳を握り、その顔の前に持って行った。

「俺はやると言ったらやるぜ。」

パンダが喋った。喋れるのか？パンダが立ち上がり握った拳を医師の方へ伸ばした。医師は昔見た映画で約束の時にこんな風にする風習を思い出した。

医師も立ち上がり右手を握り、パンダの拳に合わせた。種族を超えた男同士の約束であった。

そして医師は傍らのジュラルミンケースを拾い上げ、パンダに託した。この中には特効薬が入っている。パンダは特効薬を受け取った。

「男って、いいわね。」美女がつぶやいた。

かろうじて舗装されている国道は都会を抜けると早速炎天下の砂漠にさしかかる。行く手に蜃気楼が見える。水色の軽トラックのエンジンは快調とは言い難い。軽トラックの小さな車体にパンダの丸い体を無理やり押し込んでハンドルを握る。それだけ見ればパンダと軽トラックという取り合わせはファニーな光景ではある。

この軽トラックは赤いドレスの美女が手配してくれたものだ。

「ごめんなさい、本当はもっと大きなクルマの方が良かったのだけど。」

そう言って美女はパンダに詫びた。

「いってことよ。歩いてでも、這ってでも行くつもりだ。クルマとはありがたい。」

パンダはにや、と笑ってそう答えたものだ。

パンダが煙草を吹かす。開けはなった窓から煙が吸い出されていく。

と、バックミラーに巨大なトレーラーが映ったと思うとみるみるうちに追いついてきた。

馬力が全然違うのだろう、ホーンをぱーぱー鳴らして強引にパンダの軽トラを追い抜いてゆく。開いた窓からトレーラーがけちらした砂埃とトレーラーが排気した黒煙が朦々と入ってくる。

だが悠々と構えたパンダは気にしない。

やがて行く手に小さなドライブインが現れた。

「腹ごしらえでもするか。」パンダは軽トラをドライブインの駐車場に放り込んだ。助手席のジュラルミンケースを下げて、パンダは軽トラを降りた。

両開きのウエスタンドアを入ると、店内はオールドアメリカンな造りだ。

駐車場に他のクルマが停まっていなかったのでドライブインの客は自分だけらしい。カウンターの奥には腹の出たヒゲの親父がテングロンハットをかぶっている。

「いらっしゃい。おや、パンダとはこりゃ珍しいな。」

親父はがっはっは、と豪快に笑った。

パンダはカウンターにつくとジュラルミンケースを隣の椅子に置きながら、

「親父、食事はできるか。」と問うた。

親父は、「笹は無いぜ。」と答えた。

「笹はいらねえ。肉をくれ。」

腹ごしらえなったパンダは、煙草を吹かしながら軽トラを運転していた。日差しは強烈。地平線まで続く道路にはもやもやした曇気楼が見える。辺りは天辺が平らな、崖が垂直に近い岩山が連なっている。対向車もほとんど見ない。

軽トラのエンジンが咳き込む。エキゾーストから黒煙が断片的に吐き出している。エンジンの震動が激しく不安定になってゆく。

パンダは眉をしかめ、アクセルを緩めてみた。それでもエンジンの不調は直らず、震動も黒煙も酷くなるばかりだ。

やがて、耳障りな金属が破壊されるような音がしたかと思うと爆発音とともにボンネットから大量の煙を吐き、軽トラのエンジンは止まってしまった。

パンダは「ちっ」と舌打ちするとクルマを降り、ボンネットを開けた。エンジンから黒煙が朦々と吹き出している。辺りに焼け焦げたいやな臭いが広がる。

「このポンコツ野郎、イカレやがった。」

ふと見回すと、大型の動物の骨が朽ちている。

「やれやれ、縁起でもねえぜ。」

煙草を投げ捨ててひとり愚痴たパンダは、助手席からジュラルミンケースを取りだし、やがて砂漠の国道を歩き始めた。

照りつける日差しの中、パンダは黙々と歩き続ける。車一台も通らない。

やがて日がかげり、岩山の影が道路にのびる。それでも黙々とパンダは歩き続ける。

真っ赤な夕日が砂漠を赤く照らし、歩き続けるパンダも夕日に照らされて赤い。

そして夜になり、雲一つ無い満天の星空を見上げ、ひたすら歩く。

どれくらい歩いたろうか。空に天の川が見える。真っ黒な岩山のシルエットが月明かりに浮かび上がる。

荒れ果てた風景がパンダには良く似合う。

その時、パンダの行く手にちらちらと光が弾けるのが見えた。星ではない。やがてその光の点は5つ、6つと増え、列を作り、爆音とともにパンダの方へ近づいてきた。

ある距離にまでゆっくりと近づいたかと思うと、そこから猛烈なスピードでパンダの眼前まで矢のようにやってきた。それが大型バイクの群れだ、と分かった瞬間爆音と風圧がパンダを襲った。すれ違い、パンダは何事も無かったかのように歩き続けたがバイクの群れはUターンしてパンダに追いついてきた。

バイクの群れのライダーはみなカンガルーで、ノーヘル、サングラスに、トゲトゲのついた黒い革ジャンを着ている。

暴走族の群れはスローダウンしてパンダにまとわりついた。

先頭の一匹がパンダを舐め回すようにじろじろ眺め、声をかけた。

「ほっほー！こんなところにパンダちゃんがおるやないか！」

なぜ関西弁なのか、と問うたところで意味は無い。

「子供のアイドルのパンダは動物園にお帰りなはれ！でないといぢめちゃうぜ！」

後続のカンガルー達が奇声を発しながらパンダの周りをぐるぐる回る。バイクの爆音が岩山にこだまする。

パンダは顎を引き、じろとカンガルー達を睨んだ。

「鬱陶しい。俺は急いでるんだ。目障りだ。失せろ。」

見た目ファンシーなパンダがビビっているかと思いきや、意外な言葉に一瞬カンガルーの群れは戸惑った。しかしそれが集団でのヒステリックな怒りに転化するのに時間はかからなかった。

「なんだとお！」

「パンダのくせに生意気や！いてまえ！」

逆上したカンガルー達は一斉にバイクを加速させ、パンダの前方約100メートルほど距離を取ったかと思うとまたUターンしてパンダに迫ってきた。

手に手に鉄の棒をふりかざし、奇声を発しながらすれ違いざまパンダを棒で叩きつけようとする。

パンダの目がぎらっと光ると、ジュラルミンケースを真上に放り投げた。

カンガルー軍団が襲いかかってくる。殴りつける鉄の棒をパンダは左肘で受け、強烈な右ストレートを繰り出すとカンガルーが吹っ飛ぶ。次のカンガルーの鉄棒を受け止め、回し蹴り。強烈なパンチとキックで次々にカンガルー軍団をやっつけてしまうパンダ。圧倒的に強い！こいつはパンダじゃない、鬼だ！

最後にやってきたリーダー格カンガルーを強烈なリアットでぶちのめし、パンダは落ちてきたジュラルミンケースをキャッチした。

辺りは倒れたカンガルー達と転倒したバイク。パンダは息を荒げることもなく、涼しい顔だ。

カンガルー達のうめきが聞こえる。

「痛てえ、痛てえよお。」

転倒したハーレーの傍で呻いているリーダー格カンガルーに歩み寄り、パンダはじろっと睨み下した。

「ひ、ひいいい、ど、どうか命だけは…。」

パンダはリーダー格カンガルーの胸倉をつかみ、にやりと晒った。

「いいバイクだな。」

田舎の診療所の、一つしかない病室のベッドには、病気の男の子が横になっていた。母親はその傍で椅子に座り、リンゴの皮を剥いていた。窓の外には強烈な日差しに照らされた岩山が見えた。日差しは病室の中までは差し込んでこない。木造の診療所は古い建物で、病室の壁や床もくたびれた板張りだが、穏やかな時間が流れていた。

天井の一点をみつめたままの男の子がぼつりと言った。

「ぼくの病気、治るかな」

母親はその一言が自分の胸の内を撫でていくのを感じていた。一瞬手を止めた母親は無理に笑顔を作り、男の子に語りかけた。

「坊や、大丈夫よ。今度都会の病院からお薬が届くんですって」

しかし母親はその望みが薄いのを知っていた。無理に作った笑顔が歪み、リンゴを置いた手が思わず目頭を押さえる。

「おかあさん、なんで泣いてるの？ぼく死んじゃうの？」

そのあまりにも無垢な声に母親は頭を振り、思わず男の子を抱きしめた。

「そんなことない、大丈夫よ！」

カビを放置したような饴えた臭い。薄暗い空間には雑多な、いやおぞましい物、例えば武器として使えるような釘バットのような物が散乱していた。換気扇のファンがゆっくり回り、その光と影が床に落ちてさらに退廃的な空気を醸し出している。そこは表向き倉庫街の奥にある廃倉庫だがその実アジト、と言っても差し支えのない空間だった。

薄汚れたスチールデスクにプラスチック製の安物の電話が置いてあった。

その電話が耳障りなピープ音をかき鳴らし、淀んだ空気をかきまわした。

白い巨大な毛むくじゃらの手が、受話器に伸びた。

「俺だ。」

まるで悪魔のような、地の底からしみだしたような低い声。

『ケ、ケビンのあにきい～、ひ、ひどいんですぜ～』

電話の相手はケビンと言われた獣に泣きついた。

「なんだ情けない声出しやがって。」

ケビンはあきれた顔で、チンピラ風情が、と言いかけた。

『昨日の晩俺たちみんなやられちまって…』

「なんだとお？」

思わずケビンは本革に穴のあいたぼろぼろのソファから半身を浮かせた。こいつらはつまなきや何もできないしょうもない連中ではあるが、その一方集団になった時の実力はそれなりの

ものがある。それが全員やられたとはただ事ではない。

『それがメッチャ強い奴でやして…』

それは「強い奴」であって「強い奴ら」ではない。

「おまえらまとめて一人にやられたのか？」

『へ、へい…。あのパンダ、バケモンでっせ。』

黒目がちの目がくわっと見開いた。

「なにい？パンダだと？」

受話器を置く白い毛むくじゃらの手。その正体は片目に黒い眼帯をしている巨大な白熊。

パンダと言われて即座に苦い記憶が呼び起こされる。…まちがいない、あいつだ。その屈辱の記憶は忘れようとして忘れられるものではなく、ケ빈は奥歯をぎりぎり鳴らした。

夜、港の暗い倉庫街。遠くで船の汽笛が鳴っている。

「キャー！」

暗闇を引き裂くような女の叫び声。倉庫の間の暗い道で、場違いな赤いドレスの美女が巨大な白熊に押さえられている。そう、この時はまだ両目とも見えていたのだ。

「へっへっへ、いい女だぜ。」白熊が舌舐めずりする。

「誰か！誰か助けてえっ！」

女の絶望的な叫びが路地にこだまする。

「騒いだってだれもこねえよ。それよりねえちゃん、俺といいことしねえか。」

巨大な白熊がにやにやと気味悪い笑みを浮かべる。

その時、倉庫の影から何者かが現れた。暗闇の中ではシルエットにしか見えないが、その丸いシルエットはのそのそと歩き、やがて街灯の光の中で白熊と相對した。何と白熊ケ빈の前に立ちだかったのははたして一頭のパンダだった。

ケ빈はそのあまりにも間抜けな光景に怪訝な顔になった。パンダが、パンダが俺の行く手を阻む、だって?? それは何かの冗談じゃないか？

ケ빈は顔を崩した。ふざけやがって。

「何だお前は？大怪我したくなかったらとっととすっこんでろゴルァ。」

その威嚇の声はパンダに対してはやりすぎかとも思ったケ빈は勝ち誇ったかのようににやりと嗤った。

「パンダさん、お願い、助けて！」赤いドレスの美女の懇願の瞳がパンダに注がれる。

わずかに身じろぎしたパンダは喉の奥から意外に低い声を出した。

「俺はあいにく人助けはしない主義だ。」

白熊の手の中の美女が「そんな…！」と絶望の吐息を吐く。

白熊ケ빈がへっへっへと下品に笑う。

「パンダちゃん、話がわかるじゃねえか。」

「だがお前みたいな反吐みてえな奴をのさばらせておくのは、俺の主義じゃねえ。」

たかがパンダが吐いたあまりに意外な言葉がケ빈の脳裏を走っていき、ケ빈は一瞬目を見開いた。そして顔面をひくひく麻痺させパンダに向けてその怒りを爆発させた。

「なんだとお、パンダの分際でこのケ빈様にたてつこうってのかこの野郎！ぶっ殺してやる！」

」

女を放して白熊ケビンが身構える。その研ぎ澄まされた爪が光る。いままでこの爪の前に倒れて行った猛者は数知れず、パンダとは相手として不足はあるがこのケビン様に盾付いた代償にその命をいただいてやる、ウオオオッ！白熊が吠えた。ケビンは全身から殺気を発した。

普通なら立ちすくんでしまいそうな咆哮を耳にしてもパンダは動じない。パンダも腰を落として身構えた。その構えはまるで空手の達人のようで、その目は鋭い眼光で白熊を睨みつけている。

美女は息をのんで成り行きを見つめている。

相手に向かって走り出す白熊とパンダ。10メートル、5メートル、間がどんどん詰まっていく。白熊が腕を振り上げる。パンダの爪が光る。

決着は電光石火の一撃で決した。

すれちがいざま、パンダはジャンプして白熊の爪をかわすと爪を出したままアッパーで白熊の左目をえぐった。着地するパンダ、振り返りもしない。その後ろでは白熊が左目を押さえてあまりの痛みに絶叫している。

「ウガアアア！目がッ！目がーッ！」

そして巨木が倒れるようにその巨体が沈み、動かなくなる。あまりの痛みに失神したのだろう。立ち上がったパンダはそんなケビンをちらと見てふん、と鼻を鳴らした。

美女がパンダに駆け寄る。

「パンダさん、ありがとうございます！」

パンダは美女を一瞥すると踵を返した。

「あんたに礼を言われる筋合いはねえ。あばよ。」

美女に背を向け、歩きだすパンダ。すぎる美女。

「せめて、せめてお名前だけでも…。」

パンダは一瞬立ち止まった。

「…俺は…パンダのジョー。」

そのまま闇に消えるパンダ。

街灯の光の中立ち尽くす美女。

パンダのジョー。パンダのジョー。俺の左目を抉っていった憎き奴。絶対に許さない。

そして今度は勝利してみせる。鋭い眼光がざらりと光り、にやりと笑い立ち上がる白熊のケビン

。

「…やっと復讐のチャンスがめぐってきたぜ。フッフッフ、フハハハハハ！」

ゴミ捨て場のような廃倉庫のアジトに白熊の雄たけびが響き渡った。

見渡す限りの蒼空と砂と岩山に続く一本道を直射日光がじりじりと焼いている。一台のでかいハーレーが走っている。そのシートにはパンダが悠々と跨っていた。

燃料タンクの上にはジュラルミンケースが載っている。右手がアクセルを開ける。回転数の上がったエンジンが快調な爆音を立てる。乾いた風を受けてパンダの毛がなびいている。パンダ

はこのバイクを奪った時にガソリンが満タンなのを確認していた。この調子なら目的地まで順調に到着できるにちがいない。

ふとパンダの目が前方に何者かがいるのを発見した。道の中央に仁王立ちしている。手に何か棒状のものを持っている。

接近するとパンダの表情が曇ってきた。厄介な奴に出会ってしまった。ハーレーをスローダウンさせると、そこにいたのは釘バットを持った巨大な片目の白熊。

バイクを停止させたパンダが白熊を睨みつけながらドスの効いた声を出す。

「ケビンか。邪魔だ。どけ。」

白熊ケビンは釘バットをぽんぽん叩いて下品に嗤う。

「よく来たなジョー。お前の悪運もこれまでだぜ。へっへっへ。」

ギアをニュートラルにしてエンジンをあおるパンダ。

「ケビン、俺は急いでいるんだ。ここを通せ。」

ケビンは首を曲げて肩をとんとん叩く。

「そりゃつれないな。俺はこの日が来るのを首を長くして待ってたんだぜ。」

白熊の首はもともと長いではないか、という意見はこの際どうでもいい。

白熊のケビンはアゴを上げてパンダを睥睨する。パンダはじっと睨み返す。

「昔お前にやられたこの目がなァ。毎晩うずくんだよ。」

黒い眼帯をした自らの左目を指差し、ニヤニヤ下品に嗤うケビン。

「借りは返さなくちゃいけねえって俺は田舎のばーちゃんから教わったんだよ。へっへっへ。」

ニヤニヤ笑っていた白熊が突然パンダを睨み、パンダを指差し宣言した。

「お前を今ここで倒す！」

パンダはお前がその気なら仕方ない、と指をポキポキ鳴らしてバイクを降り、ジュラルミンケースを地面に置いた。

「それなら貴様を倒して進むまでだ。」

クールに白熊を睨みつけるパンダ。

荒涼とした岩山をバックに対峙する二匹。砂漠に一陣の風が吹き、砂埃が舞い上がった。

田舎では往診に出ていた医師が急な知らせを受けて診療所にあわてて駆け戻った。白い両開きのドアに突進し、中に入って左奥が病室だ。病室に駆け込みながら、医師は「克蘭ケの容態は！」と1人しかいないナースに問うた。

「発作がおきたのが15分前、いままでにない大きな発作です！」

男の子は横向きに背を丸くしてぜいぜい息をしている。付き添いの母親がその背中をさすっている。なんてことだ。医師は即座に判断した。

「すぐにオペの用意！」…しかし…薬はまだか！ 医師は焦燥した。

医師とナースはあわてて診察室に走り、あたふたとオペの用意をすると男の子をストレッチャ

一に移動させ廊下を移動した。ストレッチャーの上の男の子はすでに意識は朦朧で、うなされている。

母親はストレッチャーにすがり力の限り男の子を励まし続ける。「坊や、坊や、しっかりして！がんばって！」

そしてストレッチャーは診察室に入っていった。診察室のドアの上に「手術中」のランプが点いた。

母親は取り残され、泣き崩れた。

そのころ炎天下の砂漠では、パンダ対白熊の決闘が始まっていた。

白熊が釘バットをぶんぶん振り回す。

「オラオラオラァ！」と奇声を発し、白熊はじりじりとパンダに迫る。釘バットの全力スイングを喰らったらいかにパンダとてただではすまない。パンダは間合いを測り一定の距離を取っている。白熊がパンダに襲いかかる。すんでのところで避けるパンダ。このままではちががかない。なんとかして白熊の懐に入り込まねば、と思った一瞬の隙をついて白熊が振るった釘バットを腹にもろに喰らってしまった。

「ぐうっ！」パンダが片膝をつく。白熊はここぞとばかりに攻め立てる。パンダはあわてて飛び退った。

「おらおらどうしたパンダちゃんよお！逃げてばっかじゃ何もできないぜ！ぐあははは！」その通りで、逃げてばかりではパンダに勝ち目はない。眼光鋭いパンダ、白熊を睨みつけた。今だ！白熊が釘バットを振り上げた瞬間、パンダの渾身の頭突きが白熊の腹に決まった。

「うがあっ！」白熊は口から血を吐き出し、釘バットを手放してしまった。

パンダは速射砲のようなパンチの連打を白熊に喰らわした。続いてジャンプして白熊の顔面に回し蹴りが決まる。白熊はなすすべなく吹っ飛んだ。

しかし白熊も負けてはいない。むっくりと起き上がり、唸りのような叫び声を上げながらパンダに殴りかかる。

二匹の殴り合いはまるで命をすり減らすごとく壮絶で激しかった。

田舎の診療所の手術室ではオペが始まった。男の子が酸素マスクを口にして、意識はすでにないのに苦悶の表情を浮かべている。

「オペを始める。」医師がオペの開始を宣言したが、薬が届く前に何ができるというのか。

砂漠では岩山をバックに二匹の殴り合いが続いていた。白熊のパンチがパンダの顔面にヒットした。パンダは「ウォオオ！」と吠えたとアッパーカットを白熊のアゴにヒットさせた。

二匹ともその毛並みから血を滲ませてボロボロになっていく。

白熊のキックが炸裂！吹っ飛んだパンダが停めてあったハーレーに激突するとバキーンと激

しい音とともにバイクごと倒れる。燃料タンクが破損してガソリンが漏れる。

そのガソリンに引火し、炎に包まれるハーレー。

それでも二匹は殴り合いを止めない。

立ち上がり、白熊に向かっていくパンダ。パンダのパンチが白熊の腹に顔面に次々にヒットする。白熊がよろめく隙にパンダは放り出されていた釘バットを手に殴る！殴る！パンダが釘バットで白熊を滅多打ちにする。「ウガァア！」雄たけびを上げる白熊、血反吐を吐く。パンダの釘バットを右手一本で受け止めた白熊、釘バットをパンダから奪い取り今度はパンダを殴る！ぶん殴る！アスファルトに血しぶきが散る！釘バットを放り投げ、白熊がパンダを蹴る！殴る！パンダも白熊に反撃のパンチを浴びせる。

砂の上にぼつねんと置いてある特効薬のジュラルミンケース。

田舎の診療所の診察室では緊迫した空気が流れていた。

医師の額に玉のような汗がにじみ出る。

男の子が苦痛にうなされている。早く、早く薬を！

診察室の外では母親が跪き胸の前で手を組み合わせて祈っている。

「神様…お願い、坊やを助けて！」

砂漠ではぼろぼろのパンダと白熊が殴り合っていた。

全身がぼろ雑巾のように重い。あばらが数本折れているかもしれない。でもそんなことはどうでもいい。手が足が勝手に動いて相手を痛めつける。パンダは必死の形相で白熊を睨みつけた。刹那、その脳裏に写真の男の子が苦しんでいる顔が浮かんだ。これは現実なのか妄想なのか、真実なのか嘘なのか、朦朧とした頭で考える。そうだ、俺はこの男の子のために…

「ウオオオ！」雄たけびが渾身の一撃を呼ぶ。

拳を握り締め、満身の力を込めた必殺のパンチを白熊の顔面にヒットさせるパンダ。

「グヘエ…」白熊の口が力の無い声を出す。パンダは白熊の巨体が沈むのをスローモーションのように感じた。

全身血まみれの白熊が砂の上にあおむけに倒れている。腕が足が折れているかもしれない。体が動かない。その目がうつろに見上げると、そこにはこちら血まみれのパンダが見下ろしていた。

「くそ…なぜだ。なぜ俺はお前に勝てない！」言いながらも白熊の口から血が噴き出す。

パンダは一瞬ため息ともつかない息を吐くと、

「…お前が弱いからさ。」と言い捨てた。そして傍らのジュラルミンケースを拾い上げた。

足を引きずりながら立ち去るパンダ。

「あばよ。」

田舎の診療所の手術室。たまらず医師が叫ぶ。「薬はまだかー！」

その時！

診療所の入り口、廊下の突き当たりに逆光で現れる丸い人影？のシルエット。

母親が振り返る。

両開きのドアが開くとそこには！

全身傷だらけのパンダがジュラルミンケースを持って立っていた。

「待たせたな。」ジュラルミンケースがナースに手渡され、ナースは診察室に駆け込んだ。その様子を見届けたパンダは「へへっ…。」と笑ってばったり倒れた。

やわらかい朝の陽光。砂漠の中のオアシスの村でも朝夕は凌ぎやすい気温と日差しに恵まれている。診療所の前にはわずかではあるが芝生がある。その芝生に片膝を立てて座っている絆創膏と包帯だらけのパンダがいた。とりあえず応急処置くらいはしてもらったらしい。

そこへ診療所の中から車椅子に乗った男の子が母親と出てきた。母親はパンダを見とめるとふかぶかと頭を下げた。

「あなたは坊やの命の恩人です。なんとお礼を申したらいいか…」

パンダはにやっと笑うと「礼はいらねえよ。」と手をひらひら振った。

男の子が無邪気に笑う。

「パンダさん、ありがとう！」

男の子の目はきらきら輝き、その顔ははちきれんばかりの笑顔だ。そう、あの日の子供達のように。

「おう、元気になったな。」

パンダは立ち上がり、男の子の頭をくしゃくしゃと撫でる。白熊と決闘していたパンダとは別パンダのような優しい顔をしていた。

「じゃあな。」とその場を立ち去ろうとしたパンダに母親がすぎる。

「せめて、せめてお名前だけでも」

パンダは一瞬立ち止まった。

「…俺は…パンダのジョー。」

「ジョー！ありがとう！」男の子の元気な声。

パンダは軽く右手を上げ、振り返らず砂漠へと去っていった。

おしまい。

パンダのジョー

<http://p.booklog.jp/book/48041>

著者：中田しん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shishau/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48041>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48041>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.